

森納著『医人奇人―因伯の医師たち・夜話―』

本書は鳥取県岩美郡国府町で開業されている森納^{オキナ}医師が平成三年六月三十日に発刊された二百十四頁からなる著書である。四十三年編の逸話が納められている。

装幀は渋く、因伯（鳥取県）の個性豊かな医師の群像の一面が活写されるに相応しい趣がある。

著者は「あとがき」に次のように述べていられる。―過去の医師の業績、歴史を調査してみても、医師の人格、教養の多面性を知った。高い教養と豊かな医学的知識を持ちながらも奇人といわれた人も多い。その一面を捉えて書いてみた。その医師の行動が、その時代の情況なり、医療の状態を知る上に重要な資料ともなり得るからである。なかには現代の医療感覚、或は医師の倫理感から愕然と思われる逸話もない事はないが、その時代の世情として受けとめていただきたい、また、もしその人に関係ある子孫の方がおられれば、以上の理由でもって了解されたい。―と。さらに、―全てこの地方の医師に関係する話として伝えられているものに幾分手を加えて読みやすく創作風にした。―と、文体についてもあたかも短編小説のような描写を試みられている。

著者は昭和三年米子市夜見町にて誕生され、地元のみ子医専（現鳥取大学医学部）を昭和二十六年卒業されている。なみなみならぬ力量の持主であり、鳥取県を舞台に医学史上且つ地方史上に貴重な著書を多数上梓されている。

本書をひもとくにあたっては、まず時代的背景と因伯という土地柄を念頭におくことが望ましい。自然界は雨や雪の多い風土である。北は日本海の荒波に面し、南は中国山脈で山陽と隔てられている。東都にはほど遠く、交通機関にも恵まれていない。

因伯の地の医療に関したこととなると、古くは大国主命と因幡の白兔の神話に遡ることになるが、本書の登場人物は藩政時代から明治維新を経て現代に及んでいる。

鳥取藩祖池田光仲の父池田忠雄^{オキタ}は徳川家康の外孫にあたり、備前岡山藩主であった。光仲の代に国替えとなり、従兄池田光政と交替して因幡・伯耆三十二万石を領地した。最後の鳥取藩主池田慶徳は水戸藩主徳川斉昭（烈公）の五男で、最後の將軍徳川慶喜の異母兄である。

ちなみに、旧鳥取藩江戸藩邸表門は東京都上野国立博物館前庭に移築されており、往時をしのぶよすがとなっている。

明治四年廃藩置県となり、現代への布石がなされた。いまだ百有余年が経過したばかりであるが、この期間だけをみても日本の歴史の流れには国も民も疲弊した年月がまるで山並のように幾重にもある。それを乗り越えて今日の体制が築かれてきた。かつて、時の日本医師会長故武見太郎先生が「日本の医療は、明治以後国家的福祉体制が確立するまでは国にかわって医師個人が福祉を行ってきた」という意味の歴史的事実を明言されていたことが想起される。

一方、現代の医学の進歩は一朝一夕にもたらされたものではないということとは自明の理である。本書を通じて一地方である因伯

の地の先達の足跡を辿ってみても、医学の変遷の過程がうなずける。

温故知新の心をもって医の道を究めんとする時、本書からは多岐にわたる教訓を感得することができる。

(岸本 頼子)

〔森納・千六八〇—一鳥取県岩見郡国府町糸谷一〇八五七—二二一六五三九、平成三年・B六判・二一四頁・領価一千元〕

日本医学会医学用語管理委員会編

『日本医学会・医学用語辞典・英和』

本書は一九七五年に発行された日本医学会医学用語委員会編『医学用語辞典』(以下では旧版と呼ぶ)を継ぐものである。旧版を利用して裨益を受けたもの一人として、比較しながら本版を紹介して見たい。

まず、この二冊は同様の体裁を持っているが、旧版がドイツ語の見出しを英語と対等を持っていたのに対して、本版はもっぱら英語見出しだけを掲げている点が最も異なっている。ただし、一部の主要見出しには、訳語のほかにドイツ語やラテン語が付記されている。主見出し語の数は凡例によれば約六万四千語である。単純なページ数では旧版よりも約三四〇ページ増加した。見出しの欧活字は一まわり大きいボール体が使われて、見やすくなっている。

また、見出し語の配列のし方も旧版とは違っていて、たとえば

acute abdomen (急性腹症) は、旧版では acute のところでも abdomen のところでも引けたが、本版では acute abdomen としてしか出てこない。引くほうとしては両方で引けるに越したことはないが、止むをえぬことであろう。Dorland などでは abdomen でしか引けないが、これよりはましという見かたもあるかもしれない。ちなみに、本版の凡例では、複合語を一つの用語として配列するのやり方を Webster 式配列法と呼んでいる。

旧版では「infection 感染」のあとに「viral : ウイルス」のような形でおびたらしい複合語が列挙されていて、こうした省略形やダッシュがしばしばページに何十と並んでいたが、省略部分が明確でない場合も多く、不便かつ不体裁だった。この欠点は本版では一掃されている。

以上では主として形式的な比較をしてきたが、旧版の致命的な欠陥は、誤綴りが多くて、とうてい信頼できる典拠として使えないことであった。Simmonds' disease (シモンズ病) や Koplik's spot (コプリック斑) が見出しの Simmond's disease や Kopliak's spot になっているような辞書を、安心して使う気になる人など、あろうわけがない。見出し以外のところに散在している誤りは枚挙にいとまがなかった。こうした誤りは幸いなことに、本版では多くが訂正されている。

もう一つ旧版で気になったのは、凡例の後の方になるほど、「書いてよい」、「使ってよい」などという表現が増えてゆくことであった。辞書の凡例というものは当の辞書作りの上での法則を各論的に示すことで利用者の便宜を計るための存在であって、こ